

令和元年6月19日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16851

研究課題名(和文) 日本方言の活格性に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic research on the active alignment of Japanese dialects

研究代表者

坂井 美日 (Sakai, Mika)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・言語変異研究領域・特別研究員(PD)

研究者番号：00738916

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の格については従来、諸方言を含め、活格性(自動詞主語の標示が分かれる「分裂自動詞性」を特に指す)は、無いとされてきた。申請者は、日本方言の格を調査し、特に九州方言の格標示に、活格性があることを証明した。更に、その九州の現象が、世界言語の一般的な活格型(2標示体系)と異なる、新種の型(3標示体系)であることを発見した。この成果は、日本語研究を発展させるばかりでなく、一般言語学にも貢献しうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

申請者は、日本方言に活格性がある事、及び日本方言の格配列に新種の型がある事を発見した。一般的な活格型は、a. 他動詞文主語と意志自動詞文主語が同標示、b. 非意志自動詞文主語と他動詞文主語が同標示となる2標示体系であるが、九州方言には、1. 他動詞文主語と意志自動詞文主語が同標示、2. 非意志自動詞文主語が異標示、3. 他動詞文目的語も異標示となる3標示体系が存在する。これは、活格性の本質においてbが必要十分条件ではない、言い換えれば、意志自動詞文主語と非意志自動詞文主語の分裂のみが本質であるという分析を導き出す。本研究は、日本語に活格性がある事を示すばかりでなく、活格自体の概念をも変えうる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to show that Japanese has “split intransitivity (Split-S)”：which means that the subjects of active intransitive verbs and inactive intransitive verbs behave in different ways. Previous studies have proposed that there is “no evidence that Split-S exists in Japanese,” and this was a widely accepted theory for many years. However, I examined the case alignment of Japanese dialects, and showed that some dialects, especially in Kyushu, do show “split intransitivity.” Moreover, this study found that the phenomenon in Kyushu dialects is a new type of case alignment from the viewpoint of typology. Generally, Split-S of case alignment is a two marking system. However, the Split-S in Kyushu dialects is a three marking system. This study not only causes us to rethink the notion that Split-S does not exist in Japanese, but also provides important data for general linguistics.

研究分野：日本語学

キーワード：活格性 格 格配列 日本方言

1. 研究開始当初の背景

日本語の格については従来、諸方言を含め、活格性（自動詞主語の標示が分かれる「分裂自動詞性」を特に指す）は無いとされてきた。

中には、現代日本方言に活格性が存在することを示唆する研究もあったが、これに対してはデータの処理に不十分な点があることが問題として指摘されるなど、広く受け入れられることはなかった。

本研究は、従来の日本語学では一般的でなかった Silverstein の枠組みを、日本語の分析に沿うよう応用しつつ、これまでの日本方言学で看過されてきた格配列の整理を試みる。本研究により、日本語に活格性があるということを示す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上述の活格性が、日本方言に存在するということを明らかにすることである。

申請者は、研究開始当初の段階で既に、日本方言に活格性があるという予測を得ていた。

特に九州方言における予備調査からは、対格型（主語の標示が他動詞文も自動詞文も同標示 / 目的語の標示が別標示）と、典型的な活格型（他動詞主語と意志自動詞文主語が同標示 / 非意志自動詞文主語と他動詞文目的語が同標示）の中間にあたる、特殊な活格性を帯びた型があることが見込まれた。

本研究は、その実態を詳らかにするとともに、日本語の格配列に影響する要因と、その配列が生じるメカニズムを明らかにすることを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究では、上述のように、従来の日本語学では一般的でなかった Silverstein(1976)の枠組みを、日本語の分析に沿うように応用した。

具体的には、有生階層（人称代名詞>>親族・固有名詞>>人間普通名詞>>動物名詞>>無生物名詞）と、他動性の階層（他動詞文主語>>意志自動詞文主語>>非意志自動詞文主語>>他動詞文目的語）の2つの階層を掛け合わせたクロス階層を用い、格配列を網羅的に観察した。また、焦点や、尊敬 / 非尊敬、主節 / 従属節など、格に影響すると思われる複数の要因について、その影響関係の一つ一つを検証した。

現地調査については、活格性が見込まれる九州方言を中心に、各地方言の現地調査を行ない、活格的配列の記述を進めた。

分析と考察を進める上では、必要に応じて、申請者の所属する国立国語研究所が所有するコーパスや、古典文献を活用した。

これら研究の成果は、以下5節に挙げるように、国内外に発信している。

4. 研究成果

本研究の成果として、申請者は、日本方言に活格性があることを証明した。

特に、九州方言における、活格性を帯びた格配列は、世界言語の一般的な活格型（2 標示体系）と異なる、新種の型（3 標示体系）であることを発見した。

一般的な活格型は、上述のように、他動詞文主語と意志自動詞文主語が同標示、非意志自動詞文主語と他動詞文主語が同標示となる2 標示体系であるが、九州方言に存在する活格性を帯びた型は、他動詞文主語と意志自動詞文主語が同標示、非意志自動詞文主語が異標示、更に他動詞文目的語も異標示となる3 標示体系であることが明らかとなった。

この成果は、活格性の本質において、非意志自動詞文主語と他動詞文目的語の同標示は、必要十分条件ではないということを示している。言い換えれば、Sa と Sp の分裂のみが活格の本質であるという分析が導き出される。これは、従来の「活格」の捉え方を大きく変えうるものである。

本研究の成果は、日本語に活格性がないという固定概念を変えるばかりでなく、一般言語学における活格の概念をも変えうる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

(1) 坂井美日、「上方語と江戸語の準体の変化」、金沢裕之・矢島正浩編『SP 盤落語レコードが拓く近代日本語研究』(2020年2月予定)掲載頁未定、笠間書院、査読無し

(2) 坂井美日、「熊本市方言の格配列と分裂自動詞性」、竹内史郎・下地理則編『日本の格標示と分裂自動詞性』(2019年3月) pp. 37-66 くらしお出版、査読無し

(3) 坂井美日、「甕島方言の格について」、窪園晴夫外2人編『鹿児島県甕島方言からみる文

法の諸相』(2019年3月)pp. 49-81、くろしお出版、査読有り
(4)坂井美日、「宮崎県椎葉村方言のいまむかし 静かに消えてゆく、私達のことば 』、『日本語学』第37巻第7号、(2018年7月)pp.56-67、明治書院、査読無し・依頼
(5)坂井美日、「上方語における分裂文の歴史的变化』、『日本語文法史研究』第3号、(2016年12月)pp.131-153、ひつじ書房、査読無し

〔学会発表〕(計7件)

(1)Mika Sakai, “On Split-Intransitivity in Kumamoto Japanese”, The NINJAL-SGRL-UHM Linguistics Workshop, 2019年1月、査読なし
(2)Mika Sakai, ‘On the Split Intransitivity in Western Kyushu Dialects’, Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization. ’, 2018年8月、査読有り
(3)坂井美日、「九州方言における主語標示の使い分けと動作主性」、日本言語学会第156回大会、2018年6月、査読有り、<第156回日本言語学会大会発表賞>
(4)坂井美日、「<あい>の形は集落それぞれ」、椎葉方言調査中間報告会『暮らしをうつす椎葉の方言』、2018年3月、招待講演
(5)坂井美日、「上代の情報構造について 記述の中間報告 』、第13回琉球諸語研究会、2018年3月、査読無し
(6)坂井美日、「九州の方言と格標示 熊本方言の分裂自動詞性を中心に 』、成城学園創立100周年・大学院文学研究科創設50周年記念シンポジウム、2017年7月、招待講演
(7)坂井美日、「熊本方言における格標示と焦点化について 』、第146回NINJAL(国語研)サロン、2016年7月、査読無し

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕特記事項なし

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。